

No. 2846



教育ルネサンス

遠隔教育 5

海外の学生たちと協働学習

国境を超え、海外の学生と共に授業で学ぶことができるのも、遠隔教育の大きな利点だ。

11月中旬、東京・四谷の上智大学。世界の高等教育の現状や課題を学ぶ「国際高等教育論」の授業が始まると、受講する約50人の学生は持参したパソコンやタブレット端末を開き、ヘッドホンをして英語で話し始めた。画面に映るのは、ケニアとインドネシアの大学に通う学生たちだ。「ケニアの就職活動ってどんな感じ?」「留学するならどこの国に行きたい?」。学生ならではのフランクな会話もあれば、「高等教育の男女間格差についてどう考えている?」など、真剣な議論を交わす場面も。経済学部1年の関



戸栴倫さん(18)は「盛り上がったのは留学の話。意外と英語圏ではないフランスやイタリアが人気で、色々な文化を知りたいという考えが共通し

ていた」と話し、理工学部2年の中西重勝さん(20)は「理系なので実験の授業が多く、留学はなかなか難しい。日本にいなから海外の学生と一緒に学ぶ機会があるのはとても貴重」と議論を楽しんでいた。

海外の大学とオンラインでつなぎ、共通の課題について議論や発表に取り組む授業形式は「COIL(オンライン国際協働学習)」と呼ばれ、全14コマの授業のうち2コマで実施している。この日は、3か国の学生約100人が参加。代表者がそれぞれの大学の紹介や国の高等教育制度について発表した後、グループに分かれて意見を交換した。

▲オンラインで海外の学生らと議論する上智大学の学生(11月中旬、東京都千代田区)

講義の内容など相手国の大学との調整は、授業を担当するグローバル教育センターの梅宮直樹教授(51)が担う。「途上国の教育の現状を知ってもらうため、アジアやアフリカの大学を選んでいく。英語が母国語ではない国の学生同士が英語で交流することで、世界には多様な英語があることも気づいてもらえれば」と、授業の狙いを明かす。

COILは2000年代、米国で留学する余裕のない学生にも海外体験を可能にする目的で始まった。コロナ禍でオンライン会議システムが普及したため、世界中の大学で導入が進んでいる。

国内では関西大学が14年度からいち早く導入し、23年度は計21科目で430人の学生が受講した。文系学部だけでなく、理工系学部でも海外の大学と共同研究などを実施している。

上智大もコロナ禍前の18年度にCOILを導入した。昨年春には、教育学科の学生が、ロシアの軍事侵攻下にあるウクライナ・カトリック大学の学生とオンラインで合同ゼミを実施。「緊急期の教育継続」をテーマに計3回にわたり議論を交わし、参加した学生からは「戦争下にある若者がどう学んでいるのか、なぜ学んでいるのかを知る貴重な機会になった」との声があがった。

上智大の伊呂原隆副学長(54)は「COILの導入で、時間的にも空間的にも学びの自由度が高まった。様々な国や地域の学生と交流し、議論することで、異文化への理解も深まり、グローバル人材に必要な素養も養うことができる。学生には積極的に活用してもらいたい」と話す。

＊この連載は、武石将弘、松本将統、石井正博が担当しました。次回は来年2月の予定です。